



2006.4.1

美華書館名称考(1)樽本照雄 1
 晩清小説作者掃描(陸)武 禔 7
 商務印書館の火災(2)沢本香子 9
 漢訳アラビアン・ナイト(15).....樽本照雄15
 潘建国「近代小説的研究現状与
 學術空間」を読む樽本照雄21
 清末小説から24 美華書館について調べている
 と、わかるのが「定説」の強固なことです。新
 しい事実を加える文章は、ごくまれ。また、新
 説が定着するには時間がかかる。私がとなえ
 ている『繡像小説』発行遅延説が、中国では無
 視されているのも、当然かもしれません.....☒

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

美華書館名称考(1)

樽本照雄

美華書館は、アヘン戦争後、アメリカ長老派教会が上海で経営していた印刷所である。最初マカオに設立された。寧波を経て、最終的には上海に落ち着く。1930年代まで存在した

本稿においては、美華書館という名称のみを問題にする。2度の改称情況、あ

るいは、それにまつわって私が抱く疑問についてのべたい。そのほかの事柄については、別に論じる機会があるだろう。

順序として、中国では、美華書館についてどのような研究があるのかを説明することからはじめよう。

1 中国における研究

上海の美華書館については、中国近代印刷史、あるいはキリスト教とのかかわりで言及されることが多い。商務印書館を創立した人々のなかの幾人かは、美華書館で働いていた。ゆえに関連文献にその名前が必ずといっていいくらい出現する。ただし、こちらに入り込むと名称問題どころではなくなる。商務印書館については基本的に本稿では触れない。

一応の理解のためということで、とり

あえず、誰もが引用する基本文献から見
ていこう。文章名をかかげ、美華書館に
ついての記述だけを取り出し(文献の頁数
は該当する部分のみを示している)、それ
について説明を加える。あらかじめいっ
ておくが、中国において美華書館だけの
をしぼって論じた文章は、ほとんどない。

賀聖齋「三十五年来中国之印刷術」(莊
俞、賀聖齋編『最近三十五年之中国教育』上
海・商務印書館1931.9。176頁)

1844年、美国長老会はマカオに花華聖
経書房を設立した。翌年、寧波に移転し
美華書館と改称する。

骨子だけを示すと以上ようになる。

美国長老会は、日本語に翻訳すれば
「アメリカ長老派教会」である。漢語に
は、もともとの英文は示されていない。
花華聖經書房、美華書館ともに名称が出
てくるだけだ。概説という文章の性格を
考えれば、説明がないのもやむを得ない
ことだろう。

1930年代のこの文献は、ほかに説明す
るものがないという理由で、引用されつ
づける。該文は、張静廬輯註『中国近代
出版史料初編』(上海・上雑出版社1953.10)
に収録された。権威をもつ文章として中
国の研究者に利用されたという意味であ
る。1960、70年代とこの研究分野ではほ
とんど空白の時代がつづいた*1。そう指
摘しなければならないのは、不幸なこと
だ。専門論文をあげようとして、それが
ないことに気づく。あくまでも中国の研
究界であることにご留意いただきたい。

それ以後に発表された美華書館に言及

するいくつかの文献を紹介してみよう。

**曹裕才「美華書館和商務印書館的淵
源」**(『商務印書館館史資料』之三十一 北京
・商務印書館総編室編印1985.6.1。29頁)

この文章が掲載された刊行物は、タイ
プ印刷の内部発行である。外部に出るこ
とは、基本的にない。美華書館を題名に
しているから特にとりあげる。

美華書館の創設を1892年とし、創立者
は宋耀如だと書いている。この部分を見
ただけで、怪しげな文章だとすぐわかる
だろう。宋耀如(嘉樹)とは、かの有名
な宋家姉妹の父親だ。チャーリー宋とい
ったほうが通りがいいかもしれない。該
文が美華書館としたのは、名称について
の誤解に由来する、ということだけを指
摘しておく。さすがに商務印書館の記念
誌、たとえば、90周年誌、95周年誌、100
周年誌などには、いずれも収録していな
い。掲載して公開する価値がないと判断
されたい。その判断に私も賛成する。

1970年代と80年代にアメリカで出版さ
れた「宋家姉妹」ものの記述によって書
かれた。宋耀如が、商務印書館を創設し
たというのも同類だ。こちらは、商務印
書館関係者が即座に否定した。中国人の
反応を見ると、アメリカの出版物につい
ては、それだけ気にしているということ
がわかっておもしろい。別の角度からい
えば、別稿の予告のつもりでくりかえす
が、これらの誤解のもとには、名称問題
が横たわっているのだ。

柳毅『中国的印刷術』(北京・科学普及
出版社1987.6。253頁)

概説書は、通説を取り入れている。それを見れば、賀聖黨説の影響力がきわめて大きいことが理解できる。すなわち、1844年米国長老会がマカオで花華聖經書房を設立し、1845年寧波に移転、華美書館と改名した、とそのままなのだ。華美書館は、誤植である。

発表順にいうと次はマキントッシュ*2 (Gilbert McIntosh) の漢訳になる。

G・麦金托什著、方麗訳、車茂豊校「美国長老会書館(美華書館)紀事」(『出版史料』1987年第4期(総第10期)1987.12.11-12頁)

俗に『五十年史』(*The Mission Press in China, Being a Jubilee Retrospect of the American Presbyterian Mission Press, with Sketches of Other Mission Press in China, as well as Accounts of the Bible and Tract Societies at Work in China, Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 1895.* 英文未見)と称される文章の関係部分の漢訳である*3。

漢訳者の前言には、次のように書かれている(本稿の主旨にかかわるので名称は漢語のままを使用する)。

美国長老会書館の前身は花華聖經書房であり、1844年マカオに創設された。1860年に上海に移転し美華書館と改名する。『在华教会書館』の前4章から翻訳した、という。

つまり、The Mission Press を教会書館に、American Presbyterian Mission Press (APMP と略称。ただし引用文は除く) を美国長老会書館と翻訳していることがわか

る。歴史的には、もともとは花華聖經書房であり、また美華書館に改称されたというわけだ。

「書館」は、書店を意味するばあいもあるが、ここでは印刷所を示す。「印書館」に同じ。中国では、出版社は印刷所を兼ねていた。商務印書館は、商業関係の印刷所(印書館)からはじまって、のちに出版社になったのは周知のことだろう。

リチャード・コウルが1844年2月23日にマカオ到着した。1845年、寧波に移転し「花華聖經書房 The Chinese and American Holy Classic Book Establishment」と改称する。この漢訳文は、人名には英語原文を並記している。今示したように、花華聖經書房にも英語原文をそえたというわけ。1860年、上海へ移転した。この上海移転で美華書館に改称したことになる。

マキントッシュの文章は、賀聖黨論文の誤りを正すはずのものだ。

本稿で問題にする名称だから、ここでまとめる。すなわち、1844年花華聖經書房 1860年美華書館という流れだ。

たったそれだけのことが、と思われるかもしれない。ところが、それだけで終わらないのだ。

本題に入る前に、もうすこし関連文献を紹介する。マキントッシュ論文の漢訳が公表されたあとも、中国ではあいまいな記述が続く。いちど権威となった賀聖黨の文章は、その地位が揺らぐことはない。あるいは、あの広い中国の学界においては、情報が伝わる速度が遅いということができるかもしれない。

概説書の中で主要なものを参考までにあげておこう。

張秀民『中国印刷史』(上海人民出版社1989.9. 584頁)

1844年、マカオに花華聖經書房を開設、翌年、寧波に移転、美華書館と改名した。

中国の印刷の歴史は長い。数多いキリスト教会の印刷所のひとつである美華書館には、ページを割いてもこれくらいのものだ。しかし、マキントッシュの記述を取り入れているところは、さすがだ。

韓琦「十九世紀上半葉西方人对中文活字之研製」(上海新四軍歴史研究会印刷印鈔分会編『活字印刷源流』北京・印刷工業出版社1990.8. 273-274頁)

韓琦は、次のように書いている。「アメリカの中国における最も重要な印刷組織は美華書館であり、また花華聖經書房とも称する」(273頁)。「1860年、美華書館は上海に移転した。1849年にもベルリンから活字を購入した」(274頁)

上海移転を1860年とするのはいい。興味深いのは、韓琦はこの時点で、賀聖籟とも違う書き方をしていることだ。なにしろ最初から美華書館と名乗っていたと考えている。後に彼は大きな発見をするから、その彼でさえ、はじめはその程度の認識であったことを知るのだ。誰でもがその当時の定説から出発する。私は批判しているわけではない。

何歩雲「中国活字小史」(前出『活字印刷源流』所収。74頁)

何歩雲の該当論文は、『出版史料』1991年第4期(総第26期1991.12)に転載され

た。さらに、その抄録が宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻(武漢・湖北教育出版社2004.10)に収録されている。中国では、一般にいて、転載されるほどの価値をそなえた論文である、という認識だ。

何歩雲が説明するのは、こうだ。

1844年、美国長老会はマカオで花華聖經書房を設立した。1845年、花華聖經書房は寧波に移転し美華書館と改名した。

美華書館と改称したのは1845年だとし、マキントッシュの説明と一致しない。また、何は、なにによったのか知らないが、上海に移転したのは1859年だとする*4。この記述は、2004年の『中国出版史料・近代部分』第3巻でも訂正されてはいない。

同氏「美華書館」(『中国大百科全書』新聞出版 北京・中国大百科全書出版社1990.12. 213頁)でも同じだ。

朱聯保『近現代上海出版業印象記』(上海・学林出版社1993.2. 294頁)

前身はマカオの花華聖經書房で、1845年寧波に移転、美華書館と改名する。1895年上海に移転した。

従来の通説をくり返しているだけ。上海移転を「1895年」とするのは、「1859年」の誤植だろう。

この本の出版は1993年だ。しかし、著者は1988年に逝去しているので内容が通説にしたがっているのも無理はない。

以上の他にも言及するものはあるかもしれない。取りこぼしがあればご教示を願う。

さきに進もう。

1990年代ともなれば、さすがにマキントッシュの説明も定着してくる。

宋原放、李白堅『中国出版史』(北京・中国書籍出版社1991.6。182頁)

1844年、美国長老会がマカオに花華聖經書房を設立し、翌年、寧波に移転。1860年、上海に移り美華書館と改名した。

例外もある。次の吉甫少は、昔ながらの記述をくりかえすのだ。古いの新しいの、と混在するわけだ。

吉甫少主編『中国出版簡史』(上海・学林出版社1991.11。266頁)

1844年、美国基督教(新教)長老会派がマカオに花華聖經書房を開設した。1845年に寧波へ移転し美華書館と改名、1860年、上海へ移った。

美華書館へと改名する時期が旧説のままだ。

阮仁沢、高振農主編『上海宗教史』(上海人民出版社1992.7/1993.1第2次印刷。815頁)

美華書館を説明してつぎのように書いている。

「美華書館(American Presbyterian Mission Press)は英文を直訳すれば美国長老会伝教印書館となる。最初、花華聖經書房(花は花旗、つまりアメリカを指す)と称し、1844年1月23日、マカオに創設された。最初の責任者はリチャード・コウルである。1年後、寧波に移転し、……」

マカオに創設された年月日を1844年1月23日にするのは、マキントッシュの『六十年史』である。ならば、該書は、

漢訳されていない英文原書に拠っていると考える。1860年年末に美華書館は上海に移った、とするのも同様だろう。これでは、美華書館に改称したのは1860年以前からのことになる。宗教史の立場からいえば、印刷所の名称がいつどのように変化したなどという、いわば「瑣末な」ことがらは問題ではない。しかし、私にとってはその「瑣末な」ことが重要なのだ。

『出版詞典』(上海辞書出版社1992.12。522、523頁)

花華聖經書房の項目を立てる。1844年マカオに成立。原名を長老会書館といい、のちに寧波へ移転し花華聖經書房と改める。1860年上海へ移転後、さらに美華書館に改める。

「原名を長老会書館」とする部分は、マキントッシュの漢訳にもとづいている。

美華書館の項目では、1860年上海に成立、前身は花華聖經書房だという。

つまり、長老会書館 花華聖經書房 美華書館という変化があったという把握のしかただ。英語と漢語の混同があるようだが、これはひとつの見解である。

郭衛東主編『近代外国在華文化機構綜録』(上海人民出版社1993.12。310頁)

1860年12月、寧波の花華聖經書房が上海に移転し(美華書館に)改称。

以上、すこしの文献を見るだけで、もう問題が生じている。

1844年、マカオに設立されたのは長老会書館なのか、それとも花華聖經書房なのか。寧波に移転してからが花華聖經書

房だと考えるべきか。

一致している箇所はある。引用に引用をかさねて花華聖經書房とする。研究は多数決ではない。私はいつもそういう。研究者全員が一致していても、新資料の出現によって通説は一瞬にしてくつがえることがある。つぎに述べるが、該書房も、その好例なのだ。

1860年、上海に移転してから美華書館と称した。これにしても、1860年以前から美華書館であったという文献があるのも上に見てきた。 □

【注】

- 1) 中華人民共和国成立以後、キリスト教史研究がタブーであったことが指摘されている。陶飛亜「1949年以来国内中国基督教史研究述評」『縁辺的歴史 基督教与近代中国』上海古籍出版社2005.1所収。
- 2) マッキントッシュと表記したいところだ。本稿では、人名の読みは、『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局1986.2.15)による。以下同じ。
- 3) 『五十年史』のべつの部分も漢訳されている。G・麦金托什著、方橋訳、車茂豊校「在華早期的教会書館」『出版史料』1989年第1期(総第15期)1989.3。両漢訳ともに、宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第1巻(武漢・湖北教育出版社2004.10)に収録された。また、同著者の『六十年史』もある(*The Mission Press Sexagenary: Giving a Brief Sketch of Sixty Years of the American Presbyterian Mission Press, Shanghai, China 1844-1904*, Shanghai, APMP, 1904。英文未見。漢訳はない。日本語翻訳があ

る。ギルバート・マッキントッシュ Gilbert McIntosh 著、宮坂弥代生訳「美華書館六十年史」『(季刊)印刷史研究』第5巻第1号(通巻第7号)1999.7.1)。さらに『七十年史』(*Septuagenary of the Presbyterian Mission Press*, APMP, 1914。英文未見)もあるという。

- 4) 夏林根、于喜元主編『中美関係辞典』(大連出版社1992.11。162頁)の「美華書館」では、1844年、美国長老会がマカオに花華聖經書房を設立した。1845年寧波に移転し「美華書館」と改名。1859年上海へ移転、という意味のことを述べている。なにかにそう書かれているのかもしれない。あるいは、発行年から類推して『中美関係辞典』が何歩雲の文章を参照したものか。

『清末小説』第28号 2005.12.1

- 商務印書館関係資料いくつか..... 沢本郁馬
 林紓を罵る快樂(1) 樽本照雄
 『小説海』掲載の「老残遊記」記事 杜 筆恩
 中国におけるコナン・ドイル(5) 樽本照雄
 近代偵探小説の高潮従何而來..... 袁 進
 従粵中名門望族末世走出一代英才
 黄世仲の家世和早歳生活..... 顔 廷亮
 劉鉄雲・“救済善会”・《中外日報》... 劉 德隆
 《消閑報》与吳趼人的《海上名妓四大
 金剛奇書》 何 宏玲
 【書評】中国近代小説研究的重要収獲
 読《中国近代小説の興起》... 李 慶国
 李伯元遺稿(6) 李錫奇『南亭回憶録』より

晚清小説作者掃描 (陸)

武 禧

(零一八)

博陵紀棠氏

小説創作：《俗話傾談》、《諫果回甘》、《吉祥花》、《活世生机》。

博陵紀棠氏：名邵彬儒，字紀棠（生卒年不詳），署名：博陵紀棠氏，嶺南布衣紀棠。清末廣東四會縣荔枝園人。少讀書，明大義。患世人多不讀書，少明義理，棄學子業，遊歷南海諸名鄉大鎮。到即為人講善書，聽者忘倦，頗受歡迎。曾任佛山“廣善社”宣講生。每日講《省諭廣訓》一條和古今人物可法可戒的善、惡事，因此遠近知名。廣州“復初社”、西南的“敦善社”以及偏僻的一些地方也敦請他去宣講。他不計膳食，不辭勞苦，談論不倦。他研究講書的方法頗有心得，在他的小説《俗話傾談·序》中總結了他講書、撰文的體會：“善打鼓者，多打邊鼓；善講古者，須談別致。講得深奧，婦孺難知；惟以俗情俗語之說通知，而人皆易曉矣，且津津有味而誦讀之”。根據他所講的內容1870年左右，編輯成《俗話傾談》、《諫果回甘》

等書。

邵彬儒，廣東人，自署“嶺南布衣”。但又署名“博陵紀棠氏”。考：“博陵”，古地名，地處今河北，疑其祖籍爲此。

(零一九)

東嶽道人

小説創作：《哈密野史》

東嶽道人：（不見任何著錄，待考）

東嶽道人著《哈密野史》一書《清末民初小説目錄》未收。《中國通俗小説總目提要》（p.741）：鈔本二冊，題“新刊哈密野史”。據澤田瑞穗《小説娛目鈔》。

(零二零)

不奇生

小説創作：《武則天外史》

不奇生：（不見任何著錄，待考）

《小説小話》云：此書“頗有依據，筆亦姚冶，可與《隋煬艷史》相匹”。

(零二一)

尹湛納希

小説創作：《一層樓》、《泣紅亭》、《紅云淚》（未完）《青史演義》。

翻譯：《紅樓夢》、《中庸》《通鑑綱目》（一說《通鑑綱目》的翻譯者是尹湛納希的哥哥嵩威丹中，漢語名竇嵩山）。

尹湛納希（1837年-1892年）：乳名哈斯朝魯。漢名竇衡山，字潤亭。土默特左翼旗人（今遼寧省朝陽東北。一說出生在今內蒙古卓索圖盟土默特右旗·今遼寧省北票縣下府鄉）。近代蒙古族著名思想家、小説家與詩人。成吉思汗第28代孫。

尹湛納希的父名旺親巴勒，漢名寶荊山。生年不詳，1847年病逝。曾任王府協理臺吉，是愛國將領。鴉片戰爭中因守衛海疆，立戰功。旺親巴勒又是一位學者，長於蒙古史研究，精通蒙、漢、滿、藏四種文字。著作有《大元盛世青史演義》8回，並留下有關史料，為其七子尹湛納希續寫《青史演義》創造了條件。

尹湛納希的長兄古拉蘭薩(1820年-1851年)是中國近代蒙古族著名詩人。1847年世襲父職任王府協理臺吉。古拉蘭薩自幼博覽羣書。他的詩作現存83首，可以分為創作、做作與翻譯作品。創作有反侵略思想的《祝滅寇班師還》、《賊寇凶焰》、《太平頌》、揭露社會黑暗的《魑魅魍魎》、《報國》。翻譯作品有《好了歌》、《好了歌解》、《題石頭記》等。做作主要有《醒世歌》(做《好了歌解》)、《中秋水歌》(做《水調歌頭》)等。古拉蘭薩曾經翻譯過《水滸傳》，這對尹湛納希有直接影響。

尹湛納希自幼過着“名茶一杯、古書一部”的悠閑生活。閱讀過《紅樓夢》、《三國演義》、《水滸傳》、《金瓶梅》、《鏡花緣》和《三言》、《二拍》等中國小説的名著。同時掌握了蒙、漢、滿、藏多種文字。

尹湛納希的生活情況可以分為兩個階段1837-1870年為第一階段。這是他生活閑散、衣食無憂的階段；1870-1892是家道衰落、憂慮叢生的階段。尹湛納希的創作，起步於生活穩定的環境中。最早的小説《紅云淚》，約寫於父親去世，但是生活尚可的情況下，書中充滿了對童年生活的向往和眷戀。可惜此書並未完成，目前僅存

殘卷。其后接寫的是《一層樓》，再后寫《泣紅亭》。這兩部書受到了《紅樓夢》、《鏡花緣》的影響。在生活變故之后，他開始了《大元盛世青史演義》(簡稱《青史演義》)的創作。

《青史演義》一書前8回是尹湛納希的父親旺親巴勒所寫。尹湛納希為完成父親的遺志，約在1870(1871)年繼續寫作。在寫作時“絞盡腦汁、費盡心机”。它是用演義的形式寫出的一部元代史。

尹湛納希和他的家族，是中國少數民族文學中為數不多的家族。值得探討、研究。

(零二二)

東魯落落平生

小説創作：《玉閨紅》

東魯落落平生：(不見任何著錄，待考)

東魯落落平生著《玉閨紅》一書《清末民初小説目錄》未收。《中國通俗小説總目提要》(p.742)：此書原藏天津圖書館。



『近代文学研究・留得』第4期(2005.12)が発行された。劉鉄雲特集がある。

商務印書館の火災(2)
いわゆる「焼け太り」の不可解

沢本香子

張孝基「商務印書館開辦之初」1914?
初出不記。『20世紀上海文史資料文庫』6
上海書店出版社1999.9

該叢書の第1冊目の口絵を見ると『文史資料選輯』の表紙が複数かかげてある。1960年ごろから出版されていた内部発行の刊行物だろうか。該叢書全10冊は、説明によると1996年以前に出版された250種に近い資料から精選して編集したとある。

その6には、新聞、雑誌、出版社関係の文章が収録される。新資料のふたつ目は、張孝基の次の文章だ。短文である。初出は書かれていない。書かれてはいないが、高翰卿の文章と関連するのでここに紹介する。適当に区切って説明したい。

夏粹芳本是文匯報館排字工人，因故被撤職，光緒二十四年(1898)，即與鮑姓等若干友人合股3000兩銀子在北京路開辦商務印書館。當時適逢戊戌維新，印刷新書的機會到來了，於是股加股3萬兩銀子。(夏粹芳は、も

ともと文匯報館の植字工であったが、免職になったので、光緒二十四年(1898)に鮑たち若干の友人と3,000元の資本で北京路に商務印書館を開設した。当時は、戊戌維新にあたり、新しい書籍を印刷する機会がやってくる。そこで3万兩の増資を行なった)

粹芳は、夏瑞芳の字である。イギリス商の『文匯報』館で英字の植字をしていた。のちに『捷報』に入った夏瑞芳は、鮑咸恩と同じく植字工として働く。この社長兼編集者の外国人からひどい扱いを受け、それを嫌って独立したというのが商務印書館創設の経緯である。「免職になった」というのは、立場の違いからくる表現の差異であろう。張孝基論文は、『文匯報』と『捷報』を混同している。創立年を勘違いしている。最初の資金が3,000元というのは、正確な数字3,750元よりすこしばかりはずれている。3万兩の増資というのは、該当するとすれば1901年の第1次増資だ。張元濟と印有模が合計2万3,750元を投資した。このことを指すのだろう。

細かな部分は異同があるにしても、いきさつについては正確に書かれている。商務印書館の内部事情を知った人物の筆になる文章だと考えてもいいだろう。

問題は、つぎの箇所だ。

當時商務印書館業務蒸蒸日上，夏粹芳即經前清心書院校長范約翰介紹向

美生洋行 (American Trading Co.) 定購印刷機器, 価値12万両銀子, 並由范約翰作保, 貨到滬後, 商務印書館即向保險公司保足12万両銀子。機器尚未運進廠内, 但提單已開出, 当時北京路商務印書館被焚, 即領到保險費12万両銀子。於是利用此款即在海寧路造屋建廠, 營業逐漸發達, 以致資金運轉不靈。(当時、商務印書館の業務は日に日に発展しており、夏粹芳は前の清心書院校長ファーナムの紹介で美生洋行から印刷機器を購入することに決めた。価格は12万元であった。ファーナムに保証してもらい、貨物が上海に到着した後、商務印書館はすぐさま保険会社に12万元の保険をかけた。機器はまだ工場内に運び込まれてはいなかったが、保証書はすでに発行されていた。当時、北京路の商務印書館は火災にあったため、すぐさま保険金12万元を受領した。そこでこの金を利用して海寧路に工場を建設し、營業は漸次発展したが、資金は回轉不良になってしまった)

まず目を引くのが、印刷機器の保険金が「12万元」であるとのべるくだりだ。具体的に金額をあげているのは、私の知る限り、この論文しかない。また、保険金が家屋にかけられたとはいっていないことに注目しておく。

商売繁盛をいうのは、いわば外交辞令のようなものだ。なにしろ第1次増資で

資金の損失を埋め合わせただけだった。そういう時期に12万元もする印刷機械を購入した。この事実を見て、商売繁盛と誤解したのではなからうか。

12万元がどれくらいの巨額かといえば、第1次増資でようやく5万元の資本になったのを見ればわかる。修文書館の機器を購入するのも1万元だった。

ファーナム(范約翰, John Marshall Willoughby Farnham, 1830-1917) という具体的な名前が出ている。事情に詳しい人物でなければ示すことのできない人名だと考える。彼は、アメリカ北長老派教会の宣教師だ。1860年に中国にやってきて、上海清心書院の院長を24年間つとめた*2。

American Trading Co. といえば、「茂生洋行」の名前でなじみかもしれない。「美生洋行」は、それとは別会社なのだろうか。

「提單」とは、普通、船荷証券(通称 B/L) を意味する。船会社が船積みを認め、指定された場所まで運送して引き渡すことを約束した有価証券である。つまり、商品の輸入業者の段階で必要になるものであって、このばあい美生洋行が担当する手続きに含まれる。商務印書館とは直接に関係が生じない性質のものなのだ。だから、上に見える「提單」は、火災保険に関する書類と考えざるをえない。仮に「保証書」と翻訳しておいた理由である。

前出『支那經濟全書』のなかに私が注目した箇所があった。引用すれば、「宏ナル工場ヲ福建路二設立スルニ至レルモ

ノナリ然レドモ之ガ為メ一時多大ノ負債ヲ生ジ非常ナル苦境ニ陥リ収支償ハズシテ將ニ解散ノ悲運ニ遭遇セントスルニ当リ」という部分だ。これが原因で、日本金港堂と合併した、という筋書きである。

張孝基の「そこでこの金を利用して海寧路に工場を建設し、営業は漸次発展したが資金は回転不良になってしまった」という箇所と重なる。ということは、先行する『支那経済全書』の執筆者たちが拠った資料あるいは伝聞を、この張孝基も目にし共有した結果なのかもしれない。また、前出の高翰卿も同じ見方をしていることがわかる。なんらかの関係があるのだろう。

さて、印刷機器購入と火災保険の関係部分を検討することにしよう。

ファームの紹介で美生洋行より印刷機器を12万円で購入することにした。この資金は、どこから出たのか。借金したといっても、ファームが負担したわけではないだろう。銭荘から借りたとしたらそれこそ借金だ。まず、これが問題だ。

上海に印刷機器が到着したのちに12万円の保険をかけた。これは理解できる。ただし、補償額が12万円であって実際の掛け金は、ずっと少ない金額のはずだ。

「機器はまだ工場内に運び込まれてはいなかった」とは、荷物が着岸したあとと港あるいは別の場所に一時的に置かれていたという意味だろう。そうなると続く説明が理解できない。「保証書はすでに発行されていた。当時、北京路の商務印書館は火災にあったため、すぐさま保険金

12万元を受領した」とはどういうことか。

「保証書はすでに発行されていた」とは、保険が発効していたと考える。理解するのがむづかしいのは、新しい印刷機器が別の場所に保管されていたとすれば、火災にあうわけがない。焼けなかったものに保険金は支払われないはずだ。なぜ、保険金を受領できるのか。

ありえないことだが、焼けなかったが12万円の保険金はおりたでしょう。その12万元は機器購入のために支払うべき資金にほかならない。商務印書館の手元には、残るはずのない金だ。あるはずのない金を印刷工場新築に使うことなどできない。

仮に、新しい印刷機器が火災にあって保険金が出たとしよう。この保険金12万元は、当然、おりのべきものであって疑問は生じない。だが、焼けてしまったとしても購入した事実は残るわけで、美生洋行に全額を支払わなくてはならない資金である。

つまり、どのような形であれ保険金の12万元が支払われたとしても、どのみち商務印書館の手元には残らない資金である。重要なところだ。印刷工場新築に使用できるものではないという結論になる。

また、間借りをされていて火をだせば、家主に補償をしなければならぬが、それに触れないのも不可解だ。

12万元という数字を出したのは張孝基論文の新しいところだといえる。だが、以上のように不可解な部分がある。保険金がおりたという説明そのものに、さら

に印刷工場の新築が何月なのかを明示していないという点で、ほかの文献と同じ過ちをくりかえしている。

逆にいえば、火災に遭遇しているにもかかわらず赤レンガ3階建ての印刷工場を建設できた理由を説明するために、火災保険がおりたといっているにすぎない。つまり、つじつま合わせなのだ(後述)。

其時適有日本人擬在上海開設印書房，往訪美華書館費啓鴻研究，經費啓鴻告訴日人：“30万両銀子在上海開印刷廠，開不大的，不如投資与商務印書館合作更好。”於是業務更加擴大，營業更加發達，此後即在四馬路設立發行所。發行所成立後，夏粹芳即和日人拆股。伝聞夏粹芳被刺与日人有関。(この時、ちょうど日本人が上海に印刷工場を開設しようとしており、研究しようと美華書館のフィッチを訪ねたから、フィッチの口から日本人につげた。「30万円で上海に印刷工場を開くにしても、大きいものではできない。商務印書館に投資して合作するのがもっといいだろう」と。そこで業務はさらに拡大し、営業も発達した。その後、四馬路に發行所を設立し、すぐに日本人をクビにした。伝え聞くとところによると、夏粹芳が暗殺されたことと関係があるということだ)

フィッチ(費啓鴻。George F. Fitch, 1845-1923)が登場している。彼もアメリカ北

長老派教会宣教師である。1870年、中国に到着したのち上海で伝道する。1888年から1914年まで美華書館主任と『教務雑誌』の主筆を兼任した*3。

フィッチの名前が出てくるところからも、執筆者の張孝基は美華書館の事情に通じた人間だと思われる。あるいは美華書館に勤務していて商務印書館の人々とも面識があったのかもしれない。山本奈太郎が三井洋行の上海支店長に赴任してきたのが1901年だった。岳父の原亮三郎から金港堂の中国進出について調査を依頼されていたはずだから、その一環としてフィッチに接触することもあったであろう。

今まで見たこともない「30万元」という金額が出てくる。事實は、商務印書館と金港堂が10万元ずつを平等に出資して合弁会社となった。もしも、この「30万元」が正しいとすれば、金港堂にとってみれば予定よりも比較的安価な投資ですんだということになるろう。

ここでも、合弁話は、商務印書館から申し出たことがわかる。興味深い。ただし、合弁話は、火災発生よりも以前のことだと私は考えている。

發行所を設立したあと、日本人をクビにした、という箇所は私にはじめて見る。だが、その事實はなかった。合弁解消と取り違えているのではなからうか。1914年に夏瑞芳が暗殺されたのは金港堂との合弁を解消したのが原因だ、というデマが流れたことがある。この記述を見るとデマがあったことは本当だったらしい。

張孝基論文は、合併解消という重要な事実をいわない。夏粹芳暗殺だけを記す。

この部分は、当時の風聞を反映している。

夏瑞芳の暗殺が見えるから、張孝基論文が1914年以後に執筆されたことが明らかだろう。1915年の『大上海』の前だとすれば、時期的にうまくおさまる。

事情通である張孝基ですら、印刷工場の新築がいつなのか明示していないことを強調しておきたい。商務印書館と金港堂の合併問題を解明するひとつの重要な鍵だと考えているからだ。

さて、1949年後の中国ではどのような説明が行なわれているのを見ることにする。参考資料として利用できる文献のなかでわずかに3本の文章しかない。火災に言及する主要論文は、多くはないのだ。

章錫琛「漫談商務印書館」『文史資料選輯』第43輯1964.3 / 1980.12第2次印刷(日本影印)。66頁 / 『商務印書館九十年我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1。107頁

1902年、北京路工場被火焚毀，得到一筆巨大的保險賠款，於是決定再增資金，在北福建路自建廠房，並在河南路新設發行所。又為了增設編訳所，在廠房對面唐家弄租屋三間。(1902年、北京路の工場が火災で焼け、巨額の保険賠償を得た。そこでふたたび増資を決定し、北福建路に自前で工場を建設し、河南路に発行所を新設した。また、編訳所を増設するため、工場のむかひの唐家弄に3部

屋を借りた)

「巨額の保険賠償を得た」というのは、張孝基の記述を拡大解釈したとわかる。もし高翰卿の文章によっているとすれば、きわめて拡大して解釈したことになる。だいいち、この時期に増資した事実はない。自前の工場を建設できたのは、火災保険金が、それも巨額のものが出たからにちがいない、という思いこみだと考える。章錫琛も、新工場の完成日時を明示していない。正確な事実を把握していないらしい。

羅品潔遺作「回憶商務印書館」『商務印書館館史資料』之三 北京・商務印書館総編室編印1980.11.25。18頁

他們最初合辦的印刷機構設在北京路，只有一開間門面，以後擴充為兩開間。中間曾遭到過一次火災，因為曾投火險，所以損失不大。(彼らが、最初、共同ではじめた印刷組織は、北京路におかれた。たった1部屋で、のち2部屋に拡張した。1度火災にあったが、火災保険に加入していたため損失は大きくはなかった)

羅品潔は、1906年、十三歳で商務印書館の発行所に入った。身をもって体験した回想録である。

「火災保険に加入していたため損失はおおきくはなかった」。商務印書館は、間借りをしていたのだ。火災保険金は家主の手にわたったと考えるのが正しい。た

とえ、印刷機器にも保険をかけていたとしても古い機器であれば査定されるだろう。よくてせいぜいが保有していたのと同等の印刷機を入手できるくらいのものだ。自らが火元で隣近所に迷惑をかけたまま知らん顔をするわけにはいかない、と考えるのが普通感覚だ。北福建路海寧路の印刷所と火災の関係は述べていない。羅品潔が表現したように「損失はおおきくはなかった」というのが、私にはいちばん納得がいく。

朱蔚伯「商務印書館是怎样創辦起来的」『文化史料(叢刊)』第2輯1981.11。145頁

一九〇二年七月、北京路館屋失火焚毀，乃自建印刷所於北福建路海寧路，以鮑咸恩為所長，另設編訳所於唐家街，設發行所於河南路棋盤街，内部職務有了比較明確的分工，經濟基礎有了進一步的發展鞏固。(1902年七月、北京路の家屋は失火で焼けた。そこで印刷所を北福建路海寧路に自前で建設し、鮑咸恩を所長とした。別に編訳所を唐家街に、發行所を河南路棋盤街に設立し、内部の職務にかなり明確な分担を行ない、經濟的基礎はさらに發展し強化された)

朱蔚伯も商務印書館に勤務していたという。内部資料を利用したと思われる詳細な数字を合弁解消の説明に織り込んでいる。研究論文として重要だと私は考え

る。だが、火災と印刷所建設を並記して、火災保険についてはなにも書かない。

以上、いくつかの文献を見てきた。時間順に整理し直し要点を書き抜く。

『同文滬報』1902では、火災保険をかけていたことを明らかにした。

創業10年記念誌1907では、火災保険について言及しない。火災にあって印刷工場を新築したとだけいう。

『支那經濟全書』1908は、創業10年記念誌と同じ。「焼肥ノ有様」と表現しているのが興味を引く。

張孝基1914?は、12万円の火災保険金を利用して印刷工場を建設したとする。火災と新工場の建築を関係づけたのだ。

『大上海』1915と中華道人1919は、『支那經濟全書』をそのまま踏襲する。

高翰卿1934は、賠償金を受け取って印刷工場を新築したとする。

章錫琛1962は、巨額の保険賠償を得た、と表現が拡大する。

羅品潔1980は、火災保険に加入していたため損失は大きくはなかった、とおとなしい。

朱蔚伯1981は、火災保険に触れず、印刷所の新築だけをいう。

火災保険に触れるものそうでないもの、賠償金が出たの巨額だの損失は少なかったのだの、記述はマチマチである。

ただし、各文献ともに、筋道はほぼ一致しているといってもいい。火災にあり、その後、印刷工場を新築し、資金繰りがうまくいかずに日本金港堂と合弁するこ

とになった。

火災に見まわれたことと印刷工場の新築を結びつけて説明するために、それぞれの意見が分かれていると理解できる。

すなわち、次のような疑問が出現して、無理矢理の解釈を引き出すのだ。

疑問：火災にあったにもかかわらず、印刷工場を新築できたのはなぜか。

解釈：火災保険をかけていたので、多額の賠償金を受け取った。

無理に解釈をしない文献もあることは上に見たとおりだ。

火災について商務印書館から説明を聞こう。新しい資料である。 罫

【注】

2) 中国社会科学院近代史研究所翻訳室 『近代来華外国人名辞典』北京・中国社会科学出版社1981.12。135頁

3) 『近代来華外国人名辞典』142頁

『清末小説から』第80号

2006.1.1

『漢訳東西洋文学作品編目』とその編者

.....樽本照雄

晩清小説作者掃描(伍)武 禧

『新編増補清末民初小説目録』の

『小説海』掲載作品正誤・補...杜 筆恩

商務印書館の火災(1)沢本香子

漢訳アラビアン・ナイト(14).....樽本照雄

漢訳アラビアン・ナイト (15)

樽 本 照 雄

別の版本の可能性

さきの英文原本の探求2において、レイン版に収録されていない漢訳作品をあげておいた。

そのなかのひとつに注目したい。すなわち、サグデン版になく、タウンゼンド版には収められている漢訳作品である。

その作品とは、

2. フダダッドとその兄弟の話

「殺妖記」奚若翻訳、金石校訂『(述異小説)天方夜譚』第3冊

「殺妖記」奚若訳述、葉紹鈞校註『天方夜譚』下冊

【タウンゼンド】The History of Codadad and his Brothers. The History of the Princess of Deryabar.

【サグデン】なし

である。

ここでいうフダダッドは、別の訳本では、コダダードとかコダダッドというの

と同じだ。

レイン版には収録されていないのだから、漢訳の底本は、いうまでもなくレイン版ではない。

サグデン版にも存在しないのだから、漢訳の底本候補からサグデン版がはずれる。いくつかの物語のなかで、部分的に一致する語句がいくらあろうともだ。

底本であるかどうかの確認には、タウンゼンド版の原文と漢訳を見比べればよい。

昔、ハランという都にすぐれた王様がいたが、子供をさずからなかった。あるとき夢のなかで、預言者から、ザクロを食べれば願いがかなえられると聞かされた。ザクロの実を50粒食べると、49人の妃が男の子を生んだ。ひとり、子を生まないピルーゼ妃は、王から嫌われて追放されてしまう。ところが、彼女は遠く離れた土地においてあとで男の子を生んだ。その子はコダダッドと名前をつけられる。

【説部叢書】徳皮叩国之史官言。昔有君哈倫城者。国既富強。復子惠及下。民庶和洽。後宮多佳麗。而王心不怡。以未得儲嗣故也。宮中祈祷。亦惟胤統之求。一夕夢一老人。儀容嚴穆。而若先知然。謂王曰。予已悉汝意。後禱時。必長跽者再。礼畢。即詣其取石榴実任食之。必得子。ノ覚後。憶所夢。亟如言禱畢。食石榴実。至五十粒。蓋後宮有姫五十人。故食如其数。亡何。四十九人皆孕。惟一名比羅時者独否。(ダイアルベキル国の歴史官がいます。昔、ハランの都に王様が

いました。国は富強で、その恵は下々までおよび、人々は仲良く暮しておりました。後宮には美人が多くいたのです。しかし、王様の心が和まないのは、皇太子をさずからなかったからでした。宮殿でお祈りし、跡継ぎを求めました。ある夜、夢のなかで一人の老人が、容貌は厳しくかつ穏やかで、よくわかっているというように、王様に言ったのです。お前の願いは知っておる。祈るとき、2度跪きなさい。礼拝を終わると、すぐさまザクロの実を取りにいき、好きなだけ食べるのだ。必ずや子供をさずかる。ノ目が覚めたあと、夢に見たことを思い出し、すぐにその言葉通りに礼拝をしておわると、ザクロの実を食べました。50粒であるのは、後宮に50人の妃がいましたから、その数だけ食べたのです。まもなく、49人が妊娠しましたが、ただ、ピルーゼというものだけがひとり妊娠しません) 125頁

冒頭の「徳皮叩国之史官言」は、のちの葉紹鈞校註本では削除されている。物語の展開には無関係であると判断されたためかもしれない。

さて、タウンゼンド版ではどのように記述されているであろうか。はたして底本を確定することができるか。

タウンゼンド版の該当箇所を開けたとき、私は、息をのんだ。

【タウンゼンド】In the city of Harran there once reigned a king, who was blessed with every earthly happiness. He

was rich, powerful, virtuous, and most beloved by his subjects. Now this monarch had fifty sons by his different wives, the joint-heirs and successors in his kingdom. He loved them all with an equal affection, and brought them up in his palace with great care; but he took an exception against one, and entertained such an aversion against him from his birth, that he sent him, with his mother, to live and be brought up in the court of the kingdom of Samaria, a distant but friendly sovereign. (ハラシという都はある王様に統治されておりました。王様は、地上のすべての幸せに祝福されていたのです。裕福で、強力で、徳が高く、国民からとても愛されていました。王様は、彼の異なる妻によって50人の息子、すなわち王国の後継ぎ、継承者をさずかっていました。王様は、すべての息子を平等の愛情で愛されており、宮殿で細心の注意をはらって育てていたのです。ただひとつの例外がありまして、その男の子だけは生まれたときから嫌っており、その母親と一緒に、遠く離れているけれども親切な君主のいるサマリア王国に送って、育ててもらおうことにしました) 319頁

タウンゼンド版は、漢訳とはまるきり異なる。

ハラシはでてくるが、漢訳の「徳皮叩」に相当するダイアルベキルが存在しない。

漢訳では、王様には子供ができなかつ

た。ザクロを食べると子供ができると夢のなかで告げられ、その通りに実行すると49人の妃に子供ができた。ところが、タウンゼンド版では、王様は、最初から50人の子供に恵まれているのである。

この作品については、タウンゼンド版は、あきらかに漢訳の底本ではない。

漢訳では、なぜコダダッドが49人とは違う扱いをうけるのか、その理由が無理なく理解できる。ひとりだけ生まれるのが遅かったからだ。

だが、タウンゼンド版では、なぜだか王様に嫌われている、というだけで、納得のいく説明になっていない。

ここまでへだたった内容であるからには、漢訳の底本としてタウンゼンド版をあげることは不可能になる。部分的な違いにしては、最初からあまりにもかけ離れすぎている。

奚若の漢訳、すなわち「説部叢書」版漢訳は、サグデン版ではなく、また、タウンゼンド版でもない。

タウンゼンド版にしか見られない注釈が、奚若訳に見えた。これこそが、漢訳の原本である証拠になると判断したこともある。だが、ここにいたってタウンゼンド版を否定しなければならない。

両者をさかのぼれば、2種類の英訳本にたどりつく。

ひとつは、フォースター Edward Forster, M.A. 版だ。漢訳の原本が、サグデン版あるいはタウンゼンド版ではない可能性が出てきたから、私は必要にせまられてイギリスの古書店から購入した。

手元にある版本は、皮革装の小型本4冊である。日本でいえば新書版よりも2回りほど小さい。

書名は“THE ARABIAN NIGHTS.”とだけあって、一般に見られる“ENTERTAINMENT”をとみなわない。

本文は、ガラン版にもとづいているという。ロンドンのミラー社 William Miller の第3版、1810年発行だ。

以前、あげておいた1802年版が初版であるらしく、この第3版には初版の広告と第2版(1810)の後書きを収録する。1810年に第2版と第3版が発行されるくらいだから、よく売れたとわかる。

第1巻には題名を持つ物語が27話ある。物語の導入部には題名がついていない。普通“introduction”などというのだが、それが無い。無題名の導入部を数にいれれば、28篇となる。第2巻に15篇、第3巻に6篇、第4巻に10篇で、合計59篇を収める。

初版5巻本には挿絵がついていた。また後にも挿絵本が出版されている(1839)が、この第3版には、なぜだか挿絵はついていない。挿絵もなければカットもない。文字だけの、まことに地味な刊行物である。

もうひとつの可能性としてスコット版がある。

手元にあるジョナサン・スコット Dr. Jonathan Scott の英訳本(1811初版未見)は、表題に THE “ALDINE” EDITION とうたう “THE ARABIAN NIGHTS ENTERTAINMENTS” (ロンドンのピカリ

ングとチャット PICKERING AND CHATTO, 1890) 4冊本である。こちらは、アメリカの古書店より入手した。精密な挿絵が多数貼りこんであり、美しい。

第1巻に29篇、第2巻に25篇、第3巻に11篇、第4巻に21篇の合計86篇を収録する。

以前、「アラビア語原典からフランス語に翻訳したガラン版の「引き写し」が、英訳のジョナサン・スコット版だという」と紹介した。ロバート・アーウィンがそのように書いていた*33。

スコット版は、アラビア語原典からの最初の翻訳だとうたっている。にもかかわらず、実態はガラン版の「引き写し」が事実らしい。

発行年月の違いを見れば、ガランのフランス語版からフォースターに英訳版が生まれ、さらにもうひとつスコット版が出てきたという順序になるうか。

とりあえず、コダダッド物語の冒頭を以下に示そう。

【フォースター】IT is related by the historians of the kingdam of Diarbekir, that in the city of Harran there formerly reigned a most magnificent and powerful monarch, whose regard for his subjects was not less than their affection for him. He was possessed of every virtue, and wanted nothing to make him perfectly happy but the blessing of an heir. Although he had in his seraglio the most

beautiful women in the world, he still had no children. He was incessantly offering up his prayers to Heaven; when one night, while he was enjoying the sweets of sleep, a man of venerable appearance, or rather a prophet, stood before him, and said: "Your prayers are heard; you will obtain what you so earnestly desire; rise as soon as you are awake, and instantly begin praying, making two genuflections; after which, go into the gardens belonging to your palace, call the gardener, and desire him to bring you a pomegranate; eat some of the seeds, as many as may be agreeable to you, and your wishes will be fulfilled." / The king, as soon as he awoke, recollected his dream, and returned thanks to Heaven. He rose, addressed himself in prayer, and make the genuflections required; he then went into his gardens, took fifty pomegranate seeds, which he counted one by one, and eat them. He had fifty wives, who occasionally shared his bed, all of whom became pregnant; but there was one, named Pirouze¥}, whose pregnancy did not appear. (ダイアルベキル国の歴史家が書いております。ハランの都に、むかしすばらしく壮大で強大な王様が支配しておりました。王様の臣下に対する心遣いは、臣下の王様に対する愛情以上のものがありました。王様はすべての美德をそなえており、なにも必要ではないほどに完全に幸福でしたが、ただ、後継ぎが

いません。後宮には美人が多くいましたが、王様にはまだ子供がいなかったのです。絶え間なく天に祈りをささげておりました。ある夜、夢のなかに尊敬すべき風貌の、どちらかというと言者が王様の前に立ち、言ったのです。「お前の祈りは聞き届けられた。お前は、熱心に望んだものを手に入れるであろう。目覚めたらすぐに祈りに行き、2度跪きなさい。そのあと宮殿の庭に行き、庭師を呼んでザクロの実を持ってこさせなさい。種を好きなだけ食べるのだ。必ずやお前の願いはかなうぞ」 / 目が覚めたあと、王様は夢に見たことを思い出し、天に感謝しました。礼拝をして要求されたとおり跪くと、庭に行き、ザクロの実をひとつひとつ数えて50粒を食べました。王様は、時折50人の妃と寝台を共にしていたからです。妻たちは全員に子供ができました。しかし、ピルーゼというものだけがひとり妊娠しません) 第3巻244-245頁

ダイアルベキルにしても、漢訳にでてくる単語は、この英訳原文にすべてそろっている。

冒頭部分を見るかぎり、フォースター版が漢訳の底本といてもいい。タウンゼント版とはくらべものにならないくらいだ。

もうひとつスコット版も見ておく。

【スコット】Those who have written the history of Diarbekir inform us, that there formerly reigned in the city of Harran a

most magnificent and potent sultan, who loved his subjects, and was equally beloved by them. He was endowed with all virtues, and wanted nothing to complete his happiness but an heir. Though he had the finest women in the world in his seraglio, yet was he destitute of children.

He continually prayed to heaven for them; and one night in his sleep, a comely person, or rather a prophet, appeared to him, and said, "Your prayers are heard; you have obtained what you have desired; rise as soon as you awake, go to your prayers, and make two genuflexions, then walk into the garden of your palace, call your gardener, and bid him bring you a pomegranate, eat as many of the seeds as you please, and your wishes shall be accomplished." / The sultan calling to mind his dream when he awoke, returned thanks to heaven, got up, prayed, made two genuflexions, and then went into his garden, where he took fifty pomegranate seeds, which he counted, and ate. He had fifty wives who shared his bed; they all proved with child; but there was one called Pirouze¥}, who did not appear to be pregnant. (ダイアルベキルの歴史を記述した者たちは、つぎのように教えています。昔、ハランの都はとても立派で強力な王様が統治されており、王様は人民を愛し、また同じく彼らから愛されていました。王様は、すべての美德を授けられており、また、なにも必要ではないほ

どに完全に幸福でしたが、ただ、後継ぎがいません。後宮にはすばらしい婦人たちがいたにもかかわらず、子供がいなかったのです。王様は、いつも天に祈りをささげておりました。ある夜、夢のなかに顔立ちのよい人物、どちらかといえば預言者があらわれ王様に言ったのです。

「お前の祈りは聞き届けられた。お前は、望んだものを手に入れたぞ。目覚めたらすぐに祈りに行き、2度膝きなさい。そのあと宮殿の庭に行き、庭師を呼んでザク口の実を持ってこさせなさい。好きなだけ食べるのだ。必ずやお前の願いはかなうぞ」 / 目が覚めたあと、夢に見たことを思い出し、天に感謝して起きました。礼拝をして2度跪くと庭に行き、ザク口の実を50粒数えて食べました。王様は50人の妃と寝台を共にしていたからです。妻たちは全員に子供ができました。しかし、ピルーゼというものだけがひとり妊娠しません) 第3巻134-135頁

こちらにも、「ダイアルベキル Diarbekir」をはじめとして、漢訳と非常によくかよっている。

フォースター版とスコット版は、文章がうりふたつである。

フォースター版がガラン版にもとづいているならば、本文同一のスコット版がガラン版の「引き写し」だと称せられるのも理解ができる。

似ている英訳原文であるから、つぎには、フォースター版とスコット版を同時に検討する必要がでてくる。 □

【注】

- 33) ロバート・アーウィン著、西尾哲夫
訳『必携 アラビアン・ナイト 物
語の迷宮へ』35頁

潘建国「近代小説的研究現状与
學術空間」を読む

樽本照雄

第5回『文学遺産』論壇および『文学遺産』編委会拡大会議が開催された、とA4判に拡大した雑誌『文学遺産』2006年第1期(2006.1.15)で紹介されている。そこでの発表のひとつが潘建国の「近代小説的研究現状与學術空間」だ。

中国近代小説研究について、過去と現在の研究状況を総括し多くの提案を行なう。会議での発言だからか短文であるだけ、要点が鮮明になっているといえよう。

よつつの分野にわけると、1. 目録資料などの文献基礎、2. 研究の地理範囲、3. 研究対象、4. 政治文学技術の側面である。

1. 文献基礎

目録作成を重視する。近代小説の目録としては、阿英『晚清戯曲小説目』(1954)、王継権ら『中国近代小説目録』(1990[1998の誤り])および樽本照雄『新編増補清末民初小説目録』(2002)をあげる。それらが、不十分であることを指摘するだけで

はない(後述)。図書館の蔵書を実地に調査し、真に完全で信頼できる『中国近代小説総目提要』の編纂を提案する。

小説叢書について言及するのは、当然でありながら貴重だ。台湾・文雅出版社(広雅出版有限公司が正しい)「晚清小説大系」、広西人民出版社と百花洲文藝出版社の「中国近代小説大系」のふたつがある(上海書店の『中国近代文学大系』もあげてほしい)。それだけでは不足だから、さらに完備した「中国近代小説集成」を編集する。「近代翻訳小説集成」「近代創作小説集成」「近代報刊小説集成」などに分ける。これが実現したらどれほどすばらしいだろう。

研究資料では、『新小説研究資料』『時報小説研究資料』などを提案する。

2. 地理範囲

従来の研究が上海に偏りすぎているという指摘である。日本、香港、マカオ、南洋、ハワイ、サンフランシスコなどの中国人作品、あるいは、外国人(宣教師など)が中国語で書いた作品なども研究範囲に入れる。上海以外の都市、たとえば広州、天津、漢口などなど、北京でも多くの作品が発表されているから研究対象になる。

3. 研究対象

翻訳小説の重視を提言する。具体的には、近代翻訳小説目録の編集、近代小説訳者集団の研究、近代翻訳小説の底本、来源研究、近代翻訳小説類型研究などをいう。

4. 政治文学技術の3側面

政治の側面では、「文学革命」「小説界革命」にとどまっていたはならない。たとえば、西洋科学法律の伝播という角度から近代探偵小説の盛衰史を調査する。

文学の側面では、近代小説を次のようにとらえる。古代小説と現代小説の縦方向の一環として、中国小説と西洋小説の横方向の一環として。また、単一の小説文体研究から多様化した專題研究(探偵小説史、言情小説史、滑稽小説史など)へ移動する。

物質の側面でいうと、現在、分化、微細化の傾向が現われている。小説雑誌、小説新聞、各地の出版業、重要な出版組織および著名な出版社について研究されている。この3側面をバラバラではなく、ひとつの密接につながった全体として捉えなくてはならない。

潘建国は、近代小説の研究状況を的確に把握している。また、そのすばらしい提案の数々には目を見張るばかりだ。どれだけ時間がかかっても、採算を度外視しても、研究に役立つ大型出版物がそろう日がくることを願ってやまない。

以上を引用して、日本の樽本が潘建国の文章を高く評価している、と書いてもよろしい。

だが、本当に言いたいのは次のことなのだ。このように身も蓋もない書き方になるのは、潘建国は、ほかのところで書いた私の文章について、その重要部分を無視して引用したことがあるからである。

たくさんの提案を潘建国は行なっている。それらは、すばらしいとしかいいよ

うがない。逆に、あまりにも理想的であるからこそ、疑問がわき出る。本当か、本当に実現するのか、本当にやる気なのか、と私は思ってしまうのだ。旗をふるだけなら、言うだけなら、誰にでもできる。はたして、それは現実のものになるのか。潘建国は、現実化の努力をするつもりなのか。

目録編集について具体的に検討してみよう。

上に紹介した箇所、阿英、王継権ら、樽本照雄の作成した目録に不足があることを潘建国は指摘している。阿英は主として自分の蔵書を記録し、王継権らは翻訳小説を収録せず、両者ともに遺漏がとても多い。樽本は、2次文献に多くを依拠して編集し、原書を調査できず、誤収録誤記が少なくない。蔵書場所を注記せず使用するのに不便だ、という。そこから、信頼できる『中国近代小説総目提要』編集の提案が行なわれる、というわけ。

阿英の天才をもってしても、清末雑誌に掲載された小説を主軸にした目録を編集することができなかった。単行本を中心としたものにならざるをえなかったのだ。時代の制約ということができるかもしれない。私は、そう指摘したことがある。だが、問題なのは、阿英の目録を権威にまつりあげ何十年も使い続けてきた中国の研究界の方であろう。王継権らの目録は、阿英をはるかに上回っているという点で画期的なのだ。こちらは、「中国近代小説大系」の1冊だから、大系が翻

訳小説を収録していないためにそうになった。両者の誤記などについては、私の目録に詳しく記録している。

さて、『新編増補清末民初小説目録』である。

潘建国は、不足の箇所をあげているが、この発言は、潘建国『中国古代小説書目研究』(上海古籍出版社2005.10)には見られない。研究大会での発言だから、批判してみせたのだろう。

私は自分が作成した目録が完全であるなどと思ったことはない。だから、現在でも増補訂正作業を継続している。潘建国の指摘にたいして率直に頭をたれる。しかし、納得がいかないのも正直なところだ。

「2次文献に多くを依拠して編集し」

私の目録を批判したのはいいのだが、それが同時に2次文献を作成した中国人研究者たちを批判したことになるのを潘建国は理解できないらしい。

「原書を調査できず」

状況を無視したこういう発言にたいして、私は言葉を失う。たしかに原書を調査できていない部分がある。なにしろ日本で編集したのだ。外国に原書があると思う潘建国のほうが間違っている。だから、使用説明で、あくまでも参考にしてほしい、原書は自分で探すものなのだ、といている。

原書を見ることが目録作成の基本である。それは、わかっている。その努力はしているが、原書さえあれば正確な目録ができるかといえば、そうとも言えない。

誤記をする以外に問題も出てくる。

1例のみをあげる。

周作人が女性名で翻訳した「アラビアン・ナイト」の1話がある。

中国現代文学館編『唐駉蔵書目録』(内部交流資料 刊年不記(2003)。175頁)にはつぎのように記載される。

5177 俠女奴 萍雲 1905.5 女子世界社小説林 32開

蔵書目録だから原本を記録しているに決まっている。私は、該書の初版は見えない。再版本には「丙午年三月再版 / 発行者小説林総発行所」とあるから、記述が異なっているのに困惑していた。女子世界社と小説林から初版が別々に出版されたのかとも思った。

唐駉の蔵書目録に「女子世界社小説林」とあるのを見ても問題は解決しない。確証は、別のところからやってきた。

唐文一、沐定勝『消逝的風景 新文学版本録』(済南・山東画報出版社2005.8。20頁)は該書の表紙とともに奥付を掲げる。

奥付には「乙巳五月初版 / 訳述者萍雲女士 / 潤辞者初我 / 発行者女子世界社 / 印刷所東京並木印刷所 / 発行所小説林」と見える。それによって、『唐駉蔵書目録』の「1905.5」が新旧暦混用であることがわかる。

さて、再版では「発行者小説林総発行所」としか書かれていないから、目録にはそう記録するよりしかたがない。初版の奥付には、発行者と発行所がある。目

録としてはその両方を記述する手もあるだろう。だから、唐弢目録もそうした。もうひとつは、発行所の小説林だけを掲載してもいい。私なら、こちらを採用する。

当時の書籍の奥付は、一定の形になるまで不安定であった。原物があるからといって、判断に迷うことは多い。単純ではないのだ。

「誤収録誤記が少なくない」

「誤収録」というのは、清末小説ではない作品を収録しているという意味だろう。伝奇雑劇は清末小説ではない、といちいち指摘してくれた左鵬軍がいる。その指摘は、現在すすめている補訂作業においてすべて追記した。「誤記」についても、渡辺浩司、杜筆恩からの親切でかつ具体的な訂正がある。これも同様に追記、訂正している。

「蔵書場所を注記せず使用するのに不便だ」

潘建国は、誤解しているのではないか。清末民初小説は膨大な数にのぼり、あちこちの場所に所蔵されている。それをいちいち注記するのは非現実的だ。私は2次資料を注記しているから、いくらかはその役割をはたしているはずだ。

私が潘建国の指摘を読んで違和感を覚えるのは、誤記についてだ。

普通、誤記が少なくない、と発言する以上、どこがどう間違っているか、具体的に指摘する文章を用意しておくものだ。はたして潘建国にその準備があるのか。誤記の指摘をするためには、手間ヒマが

かかる。よほどの親切心がなければできはしない。潘建国は、他人が貴重な時間を割いて行なってくれていることに便乗しているだけではないのか。他人が誤記があると言っているから、それをおうむ返しに書いているだけであれば、不用意で無責任な発言であるといわれてもしかたがなかろう。

提言することとそれを実行することは、異なる。行動で示さなければ意味がない。私の著作を評して、あれがない、これがない、という人がいた。そこまでわかっているのなら自分でやったらどうだ、と答えた。その日本人は日本語が理解できなかったらしく、その後、ご本人は知らん顔である。こういうのを、一般に口舌の徒という。

潘建国の提案には、大いに期待していると書いておきたい。



清末小説から

- 日野杉匡大 蘇曼殊の翻案小説『惨世界』抄訳 (1) 北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第15号2004.3
 蘇曼殊の翻案小説『惨世界』抄訳 (2) 同上第16号2004.9
 蘇曼殊の翻案小説『惨世界』抄訳 (3) 同上第17号2005.3
 蘇曼殊の翻案小説『惨世界』抄訳 (4) 同上第18号2005.9
- 藤井得弘 「毒入りゲッペイ事件」を読み解く 公案小説としての『老残遊記』 北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第17号2005.3

管林、陳永標、汪松濤、謝飄雲、左鵬軍、閔定慶 『嶺南晚清文学研究』 広州・広東人民出版社2003.11

周 軒 奇人劉鶚流放新疆 『清代新疆流放研究』 烏魯木齊・新疆大学出版社2004.8

劉鶚在新疆的最後一封書信 同上

薛 海燕 『近代女性文学研究』 北京・中国社会科学出版社2004.9

徐 鵬緒 『中国近代文学史綱』 北京・中国社会科学出版社2004.12

孟 昭晋 中国近代書評源流概述 『書目与書評』 石家莊・河北教育出版社2004.12

陳 建華 民族“想像”的魔力 論“小説界革命”与“群治”之關係 李喜所主編『梁啓超与近代中国社会文化』 天津戶籍出版社2005.1

于 潤琦 (『唐弢藏書』)後記 于編著『唐弢藏書』 北京出版社2005.1

劉 精民 (『光緒老画刊』)前言 『光緒老画刊 晚清社会的《图画新聞》』 第1輯北京・中国文聯出版社2005.5

歐陽 健 『晚清小説簡史』 太原・山西人民出版社2005.6

孟昭毅、李載道 『中国翻譯文学史』 北京大学出版社2005.7

田 若虹 『陸士諤小説考論』 上海三聯書店2005.7

韓 洪拳 『林紓小説研究 兼論林紓自撰小説与伝奇』 北京・中国社会科学出版社2005.7

郭 豫適 (『林紓小説研究』)序 同上

張 中良 『五四時期的翻譯文学』 台湾・秀威資訊科技股份有限公司2005.8

唐文一、沐定勝 『消逝的風景 新文学版本録』 濟南・山東画報出版社2005.8

陳 平原 『中国現代小説の起点 清末民初小説研究』 北京大学出版社2005.9

李 楠 『晚清、民国時期上海小報研究 一種綜合的文化、文学考察』 北京・人民文学出版社2005.9

小型化的新民大衆文学 上海小報文学初論 『文学評論』 2005年第5期 2005.9.15

趙 修慧 一個年青編輯的夢想 紀念《中国新文学大系》出版七十周年 『出版史料』 2005年第3期(新總第15期) 2005.9.25

柳 和城 張元濟的一封信 兼談南洋公學書院“併併”說 『出版史料』 2005年第3期(新總第15期) 2005.9.25

李 九偉 《神州女報》的兩個版本 『出版史料』 2005年第4期(新總第16期) 2005.12.25

潘 建国 近代小説的研究現狀与學術空間 『文学遺產』 2006年第1期2006.1.15

『明清小説研究』 2005年第2期
(總第76期) 2005發行月日記

衛道者言 論吳趼人的写情小説
.....魏文哲
試論近代小説出版中的盜版現象 以
《申報》小説廣告為例文 娟
陳蝶仙又一筆名“超然”董智穎
《通俗文学之王包天笑》一書中的幾個問題
兼与樂梅健先生商榷沈慶会

『明清小説研究』 2005年第3期
(總第77期) 2005發行月日記

從虛無党小説的詛介与創作看無政府主義对晚清小説的影響張全之
從前期《小説月報》看清末民初对小説長短篇的認識邱培成

『明清小説研究』2005年第4期

(総第78期) 2005発行月日不記

- “小説為国民之魂” 論晚清“小説学”の尊
立与政治教化的關係駱冬青
- 也談《月月小説》对《新小説》精神的繼承
.....郭浩帆
- 略談《海上花列伝》在小説城市化上的意義
.....袁 進
- “林訳小説”对中国文学語言演变的貢獻
.....韓洪拳

北京日本学研究中心文学研究室編

『日本文学翻訳論文集』

北京・人民文学出版社2004.2

- 日本文学在中国近現代文学中的“功”与“罪”
.....劉建輝
- 近代報刊与日本政治小説の伝播 以《清議
報》、《新民叢報》為考察对照.....王志松
- 叙述者的面貌 日本政治小説《経国美談》
中訳本的叙述学分析王中忱
- 中国現代文学期刊(1915-1951)登載日本文学
作品翻訳目録李 焯

『清末小説から』第78号

2005.7.1

- 『迦因小伝』に関する魯迅の誤解・上
.....樽本照雄
- 『大共和日報附張』スクラップ.....杜 筆恩
- 百年是非,如何評説? 3欧陽榮雪
- 韓國所見清末民國通俗小説書目(初稿)
.....張 元卿
- 晚清小説作者掃描(參)武 禧
- 漢訳アラビアン・ナイト(12).....樽本照雄

『清末小説から』第79号

2005.10.1

- 『迦因小伝』に関する魯迅の誤解・下
.....樽本照雄
- 百年是非,如何評説? 4 完欧陽榮雪
- 晚清小説作者掃描(肆)武 禧
- 漢訳アラビアン・ナイト(13).....樽本照雄
- 『新編増補清末民初小説目録』の『小説海』
掲載作品正誤杜 筆恩

樽本照雄著

清末小説研究資料叢書 9

清末小説研究論

B5判 417頁 限定150部 定価: 5,250円

「清末小説研究」に関する樽本照雄の文章を集めたものです。研究論文集ではなく、研究情況についてのべるものですから範囲は広くなります。資料発掘の記録、文献案内、書評、研究者との交流記、あるいは思い出、国際学会参加報告、海外での書物探索、論争などなど、数えてみれば長短あわせて80本の文章です。